



ブナ科果実の結実豊凶調査。双眼鏡を使って一定の時間内に結実した果実を数えることで、その樹木の結実量を算出する



小池伸介

東京農工大学 / 「野生生物と社会」学会 理事

クマの大量出没の20年

2023年秋、北東北を中心にツキノワグマ(以下、クマ)の出没が多発した。直接の原因は複数種のブナ科果実(ドングリ)の不作に伴いクマの行動が変化したとともに、集落等に放棄された未収穫のカキなどが誘因物となったことによる。これまでのクマ管理は「個体管理(問題個体の管理)」と「総捕獲数管理(捕獲上限の設定)」の2つの視点で進められてきた。これらのアプローチは縮減した個体群を回復させることには貢献した。しかし、どこまで個体群を回復させるかの視点がなかったことが、2000年代以降に頻発するドングリの不作に伴う大量出没の発生や、2010年代以降の相次ぐ駆除数の更新につながったともいえる。今後は、従来から目指してきた分布域の後退を含むゾーニング(住み分け)管理を実現し維持するだけではなく、コア生息地と人間活動域の間の緩衝地帯を中心にした個体数管理をも目標とする、新たなクマ管理の時代を迎えるであろう。しかし、どのような管理目標であっても、基本となるのは科学的な情報の蓄積である。写真のような地道な食物資源量調査や、駆除個体を回収し歯や生殖器の分析を継続することで、何がクマの行動の変化を引き起こしたのか?山のクマの個体群の増減は?などを精度高く推測することが可能となる。昨年の大量出没を機に、これまで多くの地域では実現できていないクマの科学的な管理体制が実装されることを強く望む。